厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策政策研究事業

地域においてMSMのHIV感染・薬物使用を予防する支援策の研究
平成 30 年度 ～ 令和 2 年度　総合研究報告書

研究代表者　樽井正義

（H30 - エイズ - 一般 - 004）

令和3 年3月31日

研究代表者：樽井 正義（特定非営利活動法人ぷれいす東京 理事／慶應義塾大学 名誉教授）
研究分担者：生島 嗣（特定非営利活動法人ぷれいす東京 代表）
大木 幸子（杏林大学保健学部看護学科 教授）
若林 チヒロ（埼玉県立大学健康開発学科健康行動科学専攻 教授）

研究要旨

本研究は MSM の HIV 感染と薬物使用の予防および HIV 陽性者の支援を促進することを目的とし、4 つの分担研究を行った。

(1) HIV 陽性者の生活と社会参加に関する研究
（若林チヒロ）

(2) 精神保健福祉センターにおける MSM および HIV 陽性者への相談対応の現状と課題に関する調査
（大木幸子）

(3) ダルクにおける MSM・HIV 陽性者支援の調査
（樽井正義）

(4) MSM における薬物使用に対処する啓発・支援方策に関する研究
（生島嗣）

(1) HIV 陽性者生活支援策の基礎資料の作成を目的とする本調査は、2003 年より 5 年毎 4 回目となる。今回はこれまでのブロック拠点病院に加えて、都内診療所の外来患者も調査対象とした。CD4 値が高い人（>500/μl）の割合が 52.8% になり、服薬と通院の健康管理負担が減少し、恋愛や結婚などの人間関係や社会生活上の制約感の軽減が初めて見られたが、精神健康度は変わらず低いことが示された。高齢期の介護サービス利用については、費用と介護者の HIV 理解への不安が見られた。

(2) 精神保健福祉センター調査では、当事者向けの回復プログラムを 64.0% の施設が実施し、また性的少数者からは 22.0%、HIV 陽性者からは 14.3% の施設に、薬物相談を受けた経験があることが示された。HIV 陽性者の薬物相談において担当者がもつ自己効力感は、施設における回復プログラム実施の有無、担当者自身の相談経験の有無に関連が見られ、また相談経験があるほど HIV に関する認識が高く、セクシュアルヘルス相談への抵抗感が低かった。これらを踏まえて、相談担当者研修用の教育媒体を作成した。

(3) ダルク調査では、性的少数者は 93.0%、HIV 陽性者は 73.5% の施設で受け入れたことがあり、理解を進める勉強会などを開催したことが示された。調査結果を薬物使用者と HIV 陽性者の支援者とで検討し、陽性

者への支援向上のためのHIVと医療に関わる情報共有、薬物使用者の感染予防のための連携の必要性が確認された。HIV診療医療者に向けたパンフレットには、健康問題である薬物使用への理解を促すメッセージを掲載し、併せて当事者と関係者が安心して利用できる相談窓口と情報サイトを紹介した。

(4)若年MSMに向けてHIV感染と薬物使用の予防情報を発信するwebサイトStay Healthy and be Happyを開設した。webサイトにはHIVとメンタルヘルスに関する情報に加えて、HIV感染に関連する薬物等への依存の契機が身近にあることに気づかせる事例集、自分の日常のコミュニケーションの仕方を振り返るセルフチェックシートとその使用方法を紹介する動画を作成して掲載した。事例集はメデイアで紹介され、webサイトには年間1万回を超えるアクセスがあった。

A 研究目的

本研究は4つの分担研究により、MSMのHIV感染と薬物使用の予防およびHIV陽性者の支援を促進することを目的とした。

(1) HIV陽性者の生活と社会参加に関する研究(若林チヒロ)

HIV陽性者を対象とした質問紙調査「HIV陽性者の健康と生活に関する全国調査」を実施し、その結果を分析して健康管理と社会生活に関する現状を明らかにし、支援体制整備の基礎資料を得る。

(2)精神保健福祉センターにおけるMSMおよびHIV陽性者への相談対応の現状と課題に関する調査(大木幸子)

精神保健福祉センターにおける薬物相談事業の現状を調査し、その分析結果に基づき、相談担当者を対象としてHIV感染症と陽性者支援に関する研修の教育媒体を作成し、HIV感染症の診療機関、HIV陽性者の支援機関との連携を促進する。

(3)ダルクにおけるMSM・HIV陽性者支援の調査(樽井正義)

薬物依存症回復支援施設ダルクにおけるMSMを含む性的少数者およびHIV陽性者の受け入れの現状と課題を質問紙調査により明らかにし、それを踏まえてMSMと薬物使用者のHIV感染と薬物使用の予防に資する支援策を検討する。

(4) MSMにおける薬物使用に対処する啓発・支援方策に関する研究(生島嗣)

若年のMSMや男性と性行為を行うトランスジェンダーを対象にwebサイトStay Healthy and be Happyを立ち上げ、これを通じて、HIV感染と薬物等への依存の予防とコミュニケーションスキルの向上に役立つ情報を発信する。

B 研究方法

(1) HIV陽性者調査は、2003年以降5年毎に実施した調査を継承し、高齢化への備え等の質問事項を加えて調査票を作成した(1年目)。調査セット(調査説明協力依頼文、質問紙、返信用封筒、500円クオカード)は、ACCおよびブロック拠点病院(8)の外来患者に医療者より来院順に配布され(回答は無記名)、回答者から調査事務局に郵送された。今回初めて都内診療所(2)に通う陽性者についても、同様に調査した(2年目)。調査票を集計分析し(n=1,543、拠点病院1,185、診療所358)、自由記述を整理してその一部を報告に加えた(2-3年目)。

(2)精神保健福祉センターの薬物相談担当者と利用者のHIV陽性MSMに面接し、施設に対しては薬物依存相談事業の現状、相談担当者対しては陽性者薬物相談に関する経験と準備性に関して質問紙を作成した(1年目)。全国69施設に郵送、無記名回答を集計分析し(施設n=50、担当者n=90)、陽性者からの相談に対する担当者の自己効力感等を検討した(2-3年目)。これを踏まえ、HIV陽性者の薬物相談の背景情報となるHIV治療の現状とセクシュアリティに関する基本的情報を主内容とする相談担当者研修用の教育媒体を作成した(3年目)。

(3)薬物依存症回復支援施設ダルクの職員に面接し、各施設におけるMSMとHIV陽性者受け入れの現状

と課題、HIV の感染と治療についての知識に関する質問紙を作成した(1 年目)。全国 54 施設に郵送、無記名で回収された回答(n=34)を集計分析した(2 年目)。調査結果をダルクに還元して意見を求め(n=27)、これを踏まえてダルクと陽性者支援団体の職員に面接を行い、MSM の薬物使用予防策と支援策、薬物使用者の HIV 感染予防策を検討し、また陽性者を診療する医療者に向けて、薬物使用への理解を促すパンフレットを作成した(3 年目)。

(4) MSM 若年層(10-20 代)に HIV 感染・薬物使用予防情報を発信するために、コミュニティのインフルエンサーの助言を得て web サイトを開設した(1 年目)。クラブイベント等においてその周知をはかるとともに啓発を行い、また若年層の中で情報発信ができるピア・サポーターを養成する講座を開設した(2 年目)。薬物等への依存と感染の契機が身近にあることを気づかせる事例集を 5 人の当事者の協力により作成し、また自分の日常のコミュニケーションを振り返るセルフチェックシートを臨床心理士と共に作成し、その使用法を紹介する動画を 2 人のユーチューバーの出演を得て制作し、web サイトに掲載した(3 年目)。

(倫理面への配慮)

各研究分担者の所属機関、また陽性者調査については調査が行われるエイズ治療拠点病院等の各 IRB に審査を申請した。陽性者調査は無記名であり、回答の郵送をもって参加への同意とみなす。精神保健福祉センターとダルクでの調査では個人情報を収集しないが、面接調査に際しては、説明の上同意書を取得した。

C 研究結果

(1)陽性者調査から、CD4 値が高い人(>500/μl)の割合が 52.7% とこれまででもっとも大きく、服薬と通院の健康管理負担も軽減されて、性生活や恋愛、結婚、人間関係に関連した項目では初めて改善が見られたが、精神健康度が悪い人が変わらずに多いことが示された。HIV 感染に関わる近年の知見である U=U を知っているのは 56.6%、PrEP は 47.6% だった。高齢者が増え、65 歳以上が 13.2%を占めた。高齢期の生活に備えをしている人は 24.2%(「かなり」2.0%、「ある程度」22.2%)、していない人は 75.9%(「あまり」37.6%、「まったく」38.3%)で、介護サービス利用について費用と介護者の HIV 理解への不安が見られた。診療所の外来患者を初めて調査対象に加えたが、拠点病院に比して若年層が多く、感染経路は同性愛が多かった。自由記述の設問には、差別偏見の経験は 212 票、高齢期の生活は 479 票、薬物については 425 票、他の陽性者や一般の人々に伝えたいことは 467 票の回答が寄せられた。

(2)精神保健福祉センターの施設調査では、薬物依存対策事業として家族向けのプログラムを 72.0%、当事者向けの回復プログラムを 64.0% の施設が実施しており、回復プログラム実施機関の 84%が集団スタイルの SMARPP を採用していた。また性的少数者からは 22.0%、HIV 陽性者からは 14.3% の施設に、薬物相談を受けた経験があった。施設調査と相談担当者調査の結果を結合した分析では、HIV 陽性者の薬物相談において担当者がもつ自己効力感は、設置主体やその職員規模とは関連がないが、施設における回復プログラム実施の有無、担当者自身の相談経験の有無とは関連が見られた。また相談経験があるほど HIV に関する認識が高く、セクシュアルヘルス相談への抵抗感が低いことが示された。これらを踏まえて担当者研修用の教育媒体(DVD)「知っておきたい HIV/AIDS のこと」を作成し、相談経験がない段階から担当者の準備性の向上がはかれるよう、HIV とセクシュアリティの基本的知識に加えて、HIV 陽性者のリアリティが伝わる情報と支援のイメージが持てる内容を組み込んだ。

(3)ダルク調査により、性的少数者受入経験のある施設は 93.0%、その 46.7% が偏見や差別の発生を懸念していたが、51.7% の施設でセクシャリティの理解のためのワークショップ開催、居室の調整等受入の円滑化をはかっていたことが示された。HIV 陽性者受入経験のある施設は 73.5%、その 34.7% が差別や偏見、個人情報の共有範囲等を懸念していたが、60.9% の施設が感染症と感染予防の勉強会開催等を行い、77.3% が個人情報に関して本人の要望を確認していた。調査結果をダルクに還元し、同封した質問紙に半数の施設から回答を得て、HIV 感染に関わる新たな治験、医療と社会的支援に関わる情報の不足と学習機会への要望が確認された。ダルクと陽性者支援団体の職

員への面接から、陽性者支援と薬物使用者感染予防のための連携の必要性が確認された。HIV 診療に関わる医療者に向けて、健康問題である薬物使用への理解を促すパンフレット「身近な人から薬物使用について相談されたら 3」を作成し、当事者と関係者が安心して利用できる相談窓口と情報サイト、計 35 カ所を紹介した。

(4)薬物使用開始年齢は 10-20 代が最多であることから、若年 MSM を対象に HIV 感染と薬物使用の予防啓発情報を発信する web サイト Stay Healthy and be Happy を開設し、HIV、メンタルヘルス等に関わる情報を掲載した。若年層への啓発をクラブイベント等において行い、また若年層の中で情報発信ができるピア・サポーターを養成する講座を開催した。web サイトには、HIV 感染に関連した依存(薬物、アルコール、人間関係(共依存)、ギャンブル)の契機が身近にあることに気づかせる事例集を 5 人の当事者(20 − 40 代)の協力を得て作成し、イラストを添えて掲載した。事例集は 4 つのメデイアで紹介され、web サイトへのアクセスは年間 1 万回を超え、5 つの事例で計約 3 千回、内 2 つの薬物異存の事例は各 1 千回以上閲覧された。また、自分の日常のコミュニケーションの仕方を振り返るセルフチェックシートを、臨床心理士の協力を得て作成し、その使用方法を紹介する動画を、若年ゲイ男性に影響力をもつ 2 人のユーチューバーの出演を得て制作し、web サイトで公開した。

D 考察

(1)陽性者調査では、高齢期に HIV 治療を受けつつ介護サービスを利用して地域生活を送ることへの不安が示された。60 歳代は回答者の 1 割だが、50 歳代は 2 割を占め、高齢期対策の検討が課題となる。精神健康度が悪い人が多いことに変化はなかったが、性生活や恋愛、結婚、人間関係に関連した項目では改善が見られた。その背景に PrEP の普及、U=U 等の情報の広まり、LGBT への社会的認知等があるとも考えられるが、PrEP と U=U を知っている人は半数前後にとどまる。自由記述に寄せられた回答の一部は報告書に収載したが、全体の紹介については別途検討する。

(2)精神保健福祉センターの調査により、HIV 陽性者の相談に HIV 感染症、陽性者、セクシュアリティに関する知識が有用であることが示唆された。自由記述において、これらの知識の不足を補う機会が、また HIV 陽性者および薬物使用者への支援の方法や経験の共有が、多くの職員から要望された。精神保健福祉センターと HIV 陽性者の医療機関・支援団体との連携により陽性者支援が促進され、陽性者のために地域の相談支援を含む広範な多職種協働(IPE)体制が構築されることが期待される。

(3)薬物依存は孤立の病と言われ、回復には人とのつながりが不可欠だが、HIV 診療の場で陽性者とつながる医療者が薬物使用への理解を持つことは、使用の抑制を促す一助になると思われる。また、薬事犯者の中で注射器共用経験は 70%、C 型肝炎の既往は 46% という調査もあることから、HIV 感染の広がりが危惧され、接触が困難な薬物使用者への感染予防策として、刑務所内での薬物依存離脱指導に参加するダルクの職員の協力を得て、HIV に関わる情報を伝達することが考えられる。

(4) MSM の HIV と依存症に関する身近な事例集をネットニュースなどで情報伝達することによって、各事例 200 ～ 1,000 回の閲覧を得ることができた。事例ごとに閲覧数に違いがあるのは、タイトルによるのか、イラストによるのかは不明だが、大きな差があった。しかし、相談や支援、当事者組織に関するページに 745 の閲覧を得ることができたのは大きな成果だった。web サイトの Stay Healthy and be Happy は公開を継続し、どのような MSM 層に情報が届いたのか、どのような効果が期待できるのかを評価しつつ、内容を充実させていく必要がある。

E 結論

(1) HIV 陽性者調査により健康管理と社会生活に関する現状を明らかにした。CD4 値が高い人の割合が半数を超え、服薬と通院の健康管理負担が減少し、恋愛や結婚などの人間関係や社会生活上の制約感の軽減が初めて見られたが、精神健康度は変わらず低いことが示された。診療所の陽性者は、大部分が MSM という属性の違いはあるが、メンタルヘルスや社会生活の問題をもつ人の割合は、拠点病院と同程度だった。

また高齢期の治療継続と介護サービスに対する陽性者の不安は、対応が求められる課題である。

(2)精神保健福祉センターにおける薬物相談事業の現状を明らかにした。HIV 陽性者からの相談において相談担当者がもつ自己効力感に関連する要因は、薬物相談全般への自己効力感、MSM に関する知識、HIV 感染症の福祉制度に関する知識、セクシュアリティへの抵抗感であった。この調査結果から、担当者に向けた HIV 感染症、陽性者、セクシュアリティに関する教育媒体を用いた研修の機会、さらには HIV 診療機関や陽性者支援団体等とのネットワーク形成の重要性が示唆された。

(3)ダルク調査によって、MSM および HIV 陽性者受け入れが多くの施設で行われている現状を明らかにした。薬物使用者の支援者に不足している HIV 感染の近年の知見と医療福祉に関する情報の共有、そして HIV に関わる医療者に求められる薬物使用への理解の促進が、陽性者の支援と薬物使用の予防に必要であることが確認された。またダルクとの今後の連携によって、薬物使用者への HIV 感染予防情報の提供を進める方策を検討することができた。

(4)若年 MSM に向けて情報を発信する web サイト、Stay Healthy and be Happy を作成し、影響力のあるクリエイター、インフルエンサー、メディアに協力を依頼することで、情報を拡散できることが確認された。感染や依存の契機となる具体的事例と支援情報をセットで提供することで、相談や支援、当事者組織に関する情報へのアクセスも促すことができた。また、自分の日常のコミュニケーションの仕方を振り返るセルフチェックシートとその使用法の動画を作成した。

F 健康危険情報

なし

G 研究発表

研究代表者：樽井正義

1. 論文発表

1) Koto, G., Tarui, M., Kamioka, H., Hayashi, K.: Drug use, regulations and policy in Japan, International Drug Policy Consortium 2020. April 2020. http://fileserver.idpc.net/library/Drug_use_regulations_policy_Japan.pdf

2. 学会発表

1)樽井正義、生島嗣、徐淑子、山本大 . ダルクにおける性的少数者および HIV 陽性者への薬物依存回復支援の現状 . 日本エイズ学会、2020 年、東京 .

研究分担者：生島嗣

1. 論文発表

1)生島嗣 . HIV 陽性者支援の現場から― MSM（男性とセックスをする男性）への支援を中心に . 松本俊彦編 ,「死にたい」に現場で向き合う 自殺予防の最前線 . 日本評論社 . 121-132, 2021.

2)生島嗣 . ゲイ・バイセクシュアル男性のネットワークと相談行動― HIV・薬物使用との関連を中心に . 松本俊彦編 ,「助けて」が言えない SOS を出さない人に支援者は何ができるか . 日本評論社 . 218-230, 2019.

3)大槻知子、生島嗣、三輪岳史、池上千寿子、樽井正義 . ゲイ向け GPS 機能付き出会い系アプリを利用するトランスジェンダーの性の健康に関する調査 . GID（性同一性障害）学会雑誌 . 11(1):91-95, 2018.

4)生島嗣 . ゲイ・バイセクシュアル男性のネットワークと相談行動― HIV・薬物使用との関連を中心に . こころの科学 . 202:76-80, 2018.

5)生島嗣 . NPO 法人による HIV 陽性者とその家族への支援の現状と課題 . 社会福祉研究 . 133:83-90, 2018.

2. 学会発表

1) Ikushima, Y. Patterns of PrEP use among men who have sex with men in Japan. Asia Pacific AIDS & Co-infections Conference (APACC) 2020, October 15-17, 2020.

2)生島嗣、三輪岳史、大槻知子、山口正純、大木幸子、若林チヒロ、樽井正義 . HIV 検査と告知時期に関する考察―「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から― . 日本エイズ学会、2020 年 .

3)生島嗣、三輪岳史、大槻知子、山口正純、大木幸子、若林チヒロ、樽井正義．HIV 陽性と就労に関する考察―「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から―．日本エイズ学会、2020 年．

4) 生島嗣．地域における HIV 検査―「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から．日本公衆衛生学会、2020 年．

5) Ikushima, Y. Chemsex situation among Japanese MSM Community. The 8th ILGA Asia Regional Conference, Aug 19-23, 2019, Seoul, South Korea.

6) Ikushima, Y. Experiences of PLACE TOKYO: Challenges of Japan and Asia. The 5th AIDS Forum of Beijing, Hong Kong, Macau, and Taiwan, April 12-13, 2019, Taipei, Taiwan.

7)大槻知子、生島嗣、三輪岳史、池上千寿子、樽井正義．ゲイ向け GPS 機能付き出会い系アプリを利用するトランスジェンダー等の性の健康に関する調査．GID（性同一性障害）学会、2019 年、岡山．

8) Ohtsuki, T., Ikushima, Y., Miwa, T., Yamaguchi, M., Ikegami, C., and Tarui, M. Sexual behavior and health of transgender people who are sexually active with MSM in Japan; an online survey through gay geosocial networking mobile application, LASH study. The 22nd International AIDS Conference, July 23-27, 2018, Amsterdam, Netherlands.

9)生島嗣、三輪岳史、野坂祐子、山口正純、大槻知子、若林チヒロ、林神奈、樽井正義．若年 MSM の薬物使用開始と相談行動の考察～ LASH (Love life And Sexual Health) 調査から．日本エイズ学会、2018 年、大阪．

10)山口正純、三輪岳史、大槻知子、生島嗣、樽井正義．HIRI-MSM を参考にしたわが国の MSM における HIV 感染リスクの評価―ゲイ向け GPS アプリ利用者の意識や行動に関する LASH 調査から．日本エイズ学会、2018 年、大阪．

研究分担者：大木幸子

1．学会発表

1)大木幸子、生島嗣、樽井正義．精神保健福祉センターにおける HIV 陽性者への薬物相談対応の現状．日本エイズ学会、2020 年．

2)大木幸子、若林チヒロ、斎藤可夏子、生島嗣．40 歳以上の HIV 陽性者の将来の介護希望場所と関連要因―「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から―．日本エイズ学会、2020 年．

3)大木幸子．高齢期の備えと関連要因―「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から（第 3 報）．日本公衆衛生学会、2020 年．

研究分担者：若林チヒロ

1．学会発表

1)若林チヒロ、池田和子、杉野祐子、谷口紅、中濵智子、東政美、生島嗣．HIV 陽性者の基本的属性―「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から（第 1 報）．日本エイズ学会、2020 年．

2)山口正純、三輪岳史、大槻知子、大木幸子、生島嗣、若林チヒロ、樽井正義．HIV 陽性者における薬物使用パターンの経時的変化―「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から．日本エイズ学会、2020 年．

3)中濵智子、東政美、池田和子、杉野祐子、谷口紅、生島嗣、若林チヒロ．HIV 陽性者の情報の Update における課題―「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から（第 2 報）．日本エイズ学会、2020 年．

4)東政美、中濵智子、池田和子、杉野祐子、谷口紅、生島嗣、若林チヒロ．HIV 陽性者の高齢化と介護―「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から（第 3 報）．日本エイズ学会、2020 年．

5)杉野祐子、谷口紅、池田和子、東政美、中濵智子、青木孝弘、田沼順子、生島嗣、若林チヒロ．HIV 陽性者の併存疾患と受診行動―「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から（第 4 報）．日本エイズ学会、2020 年．

6)谷口紅、杉野祐子、池田和子、東政美、中濵智子、青木孝弘、田沼順子、生島嗣、若林チヒロ．HIV 陽性者の病名開示―「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から（第 5 報）．日本エイズ学会、2020 年．

7)池田和子、杉野祐子、谷口紅、東政美、中濵智子、青木孝弘、田沼順子、生島嗣、若林チヒロ．薬害被害者の精神健康―「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から（第 6 報）．日本エイズ学会、2020 年．

8)若林チヒロ．健康状態 15 年間の変化―「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」（第 1 報）．日本公衆衛生学会、2020 年 .

H 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1．特許取得

なし

2．実用新案登録

なし

3．その他

なし